

平成22年野球殿堂入り表彰式

事務局長 佐藤 宏

前号に引き続き表彰式の話です。平成22年特別表彰の故・古田 昌幸さんの表彰式が8月27日、東京ドームで開催された都市対抗野球の緒戦の試合開始前に行われました。

古田さんは'56年に立教大学からプロ球団の誘いを断って熊谷組に入社。勝負強い打撃と二塁手として抜群の守備で活躍されました。'57年にはデトロイトで行われた第3回世界野球大会に出場し、日本チームとして初の世界一達成に貢献されました。都市対抗野球大会には選手、選手兼監督として13年連続を含む16回にわたって出場され、3回の優勝を経験されました。アマチュア一筋を貫かれ、選手引退後も日本野球連盟の要職を歴任され、社会人野球の振興に尽力されました。こうしたことが高く評価され、今回の殿堂入りとなりました。



挨拶する古田 淑子氏

表彰式は東京ドームのグラウンドで、数多くの観衆が見守るなか、緒戦の対戦チームである東京ガス、NTT西日本のメンバーもベンチ前に整列して行われました。「ミスター都市対抗」と呼ばれた古田さんにとっては最高の舞台と言えるかもしれません。

古田さんのかつての雄姿がオーロラビジョンで紹介された後、(助)野球体育博物館加藤 良三理事長より、淑子夫人に記念のレリーフが渡されました。また、立教時代に同期生でもあった大沢 啓二氏から花束が贈呈され、和気藹々とした雰囲気のなかで記念撮影を行いました。最後に淑子夫人よりご挨拶があり、大きな拍手が贈られるなか、表彰式は無事に終了しました。



左から 加藤 良三野球体育博物館理事長、古田 徹哉氏、古田 淑子氏、大沢 啓二氏、古田 淳哉氏ご一家
(大沢 啓二さんは10月7日に急逝されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。)



もの 知ってほしいこんな資料(72)

一高ウイニングボール

開催中の企画展「野球発達史 昔のプレー・昔のルール」で展示中の一高（旧制第一高等学校）のウイニングボールの中から二つをご紹介します。

左は、大正3（1914）年4月6日に4対1で三高（旧制第三高等学校）に勝利した時のもので、京都の三高校庭で開催されました。明治39（1906）年4月6日の第1回から数えて7回目の一高・三高戦で、7回裏に三高が1点得点すると8回表に一高が追いつき、そのまま延長戦に入り、13回表に一高が一死の後、四球、安打、エラー、二塁打などで3点を入れて勝利しています。この結果、通算で一高の4勝2敗1分となりました。また、『三高野球部史 一創部100周年記念』には、この試合から三高が赤い応援旗を使うようになったとの記述があります。一高・三高戦は昭和23（1948）年まで38試合行われ、通算で一高の18勝19敗1分でした。



右は、大正4（1915）年5月8日に4対3で慶應に勝利した時のもので、慶應の三田綱町球場で開催されました。1回表に一高が1点、2回裏に慶應が1点、さらに5回裏に2点を加えると、一高は6回表に1点返し、8回表に四球、盗塁、内野ゴロの後スクイズで同点、さらにエラーがからんで1点勝ち越し、そのまま接戦を制して勝利しています。一高にとっては、明治36（1903）年以来12年ぶりとなる対慶應戦の勝利でした。この試合には、腰本 寿（1967年殿堂入り）が慶應の2番三塁手で出場しています。

左は、ボールの縫目がとても細かく、明らかに現在のボールとは違います。数えてみると縫目は202もありました。同年代でも右のボールのように現在に近いものもあります。右の縫目は105でした。

現在の硬球の縫目は108です。日本ではいつから108になったのか、はっきりとした資料は見つかりませんでした。当館所蔵の資料で一番古い記述としては、『最新野球規則（1953年）』の1.13の【注】で「現在我が国の両リーグの採用している使用球の標準は次の通りである」とあり、その3番目に縫目数108と書かれています。このころにはすでに108になっていたと考えられます。ちなみに、当館所蔵の戦前のプロ野球使用球は、調べた範囲ではすべて112でした。

学芸員 新 美和子

企画展「野球発達史 昔のプレー・昔のルール」は11月28日(日)まで開催しています。

野球のルールの変遷に加え、明治、大正時代のバットやボール、グラブなどの用具や当時の写真や絵はがきなどを展示しています。ぜひご覧ください。



殿堂入りの人々を語る (29)

父と本

頼久 延子 (広瀬 謙三氏 長女)



1973年野球殿堂入り
広瀬 謙三氏レリーフ

父は愛知の高等小学校を卒業後、早稲田大学の講義録などで独学しながら、新愛知新聞社の所謂「子供さん」として、原稿の受け取りや校正の手伝いをしていました。

その後上京。国民新聞を経て、時事新報の運動部記者になりました。

野球に関しては、時々、記者クラブの野球大会に補充として駆り出されていた程度でしたが、1936年(昭和11)職業野球連盟誕生と同時に、国民新聞の上司でいらっしゃった鈴木 龍二氏のお誘いで、初の公式記録員になったと聞いております。

記録員と新聞記者の二足の草鞋をはき、朝は原稿を書き、午後は野球場、夜は新聞社と両立出来ていたのが不思議なくらいです。又、戦後は地方の試合が多く、遠征に出れば一ヶ月は家を明けるのが常でしたので、父と接する機会はあまりありませんでした。

只一度、地方遠征に同道して、選手が移動する電車に乗せて貰った事がありました。選手達は、マンガの本を取り合ったり、偶然、電車に飛び込んで来た雀を追いかけ廻したり、宛ら修学旅行生のようなでした。にこにこと眺めている西沢 道夫選手。そんな中、スタルヒン投手が、ドアの所で一人静かに本を読んでいらした姿がとても印象的でした。今では考えられない事ですが、記録員がボールを鞆きんがに詰めて運ぶ時代でした。試合前、ボールを拭く手伝いをしていると、突然、審判員の方が禪一つで長良川を泳ぎ始めたのです。流されながらも泳ぎ切ると、旅館の窓々から大拍手。制服に着替えると、何事もなかったように「ほな、行ってきますわ」と球場に向かわれる変わり身の速さに驚きました。球場では見られない選手や審判員の姿を垣間見た、のどかな時代の旅でした。

また、父は無類の本好きでした。戦争中、空襲警報が発令されても防空壕に入らず、月明かりを頼りに本を読んでいたほどでしたから、ほぼ毎日、本の入った風呂敷包みを抱えて帰りました。時には、高価な本を買ってしまい、古本屋の親父さんが付け馬として付いて来る事もありました。元々、国語の教師になりたかったそうで、本はどんどん増殖して何千冊かの本・雑誌・新聞が、家中至る所に雑然と積まれていました。「全部把握している」の一言で、動かすことは厳禁。或時、これだけの本を全て記憶している筈がないと、こっそり移動させておいたら酷く叱られました。

父の死後、本は色々な所に寄贈されましたが、本が全て無くなった日、重しがすっかり取れて、一階の襖がパタンパタンと自然に倒れたそうです。家も家族も堪えていたのです。今、博物館などでこれらの本や資料を、手に取って下さる方がいます。役立てて頂けるならあの本に埋もれた生活も、それは、それで良かったのかもしれません。戦災を免れた事も幸運でした。晩年は病気がちで、父との時間が有り余るほどありました。ふらっと出掛ける父の後を追うと、行き先はやはり本屋でした。

ひょんな事から記録員になり、プロ野球連盟誕生の時に居合わせた一人として、プロ野球の発展に多少なりとも寄与出来た事は幸せだったと思います。

尚、記録のコンピューター化の際、集計ミスなど古い記録の集計に、大変苦労されたと聞いております。ご尽力くださった方々に感謝申し上げます。



こんにちは図書室です



『魔球術』と長塚 順次郎

当館では企画展「野球発達史 昔のプレー・昔のルール」を開催していますが、この中には明治時代の書籍も展示されています。今回、その中から『魔球術』を紹介します。

『魔球術』（86ページ 縦17cm）はアメリカで1880年代に出版されたEdward J. Prindle著『The Art of Curve Pitching』を一高在学中だった長塚 順次郎が訳したもので、1904（明治37）年に出版されました。第1編「魔球術」、第2編「投手ノ注意」からなり、第1編では、理論、実行、失敗の原因並びに注意、初学者に向けての暗示、結論の5章構成で、第2編は投球の正鵠（要点の意）、策略、投手に対する一般の注意の3章で構成されています。球が曲がるメカニズム、変化球の投げ方やその軌跡などが図とともに説明されています。また、科学の道に進む順次郎が、読者が理解しやすいように注を入れて説明しています。



訳者の長塚 順次郎は茨城県議会議長を務めた長塚 源次郎の二男として1880（明治13）年に現在の常総市に生まれました。兄は農民文学『土』の作者として有名な長塚 節です。

順次郎は水戸中学（現在の水戸一高）へ入学し、本格的に野球を始めました。水戸中学を卒業後は、第一高等学校に進学します。順次郎は一高でも外野手としてプレーし、1903（明治36）年に行われた一高対米国軍艦ケンタッキー号との試合でも、7番ライトで先発しています。

また、順次郎はコーチとして地元の下妻中学（現在の下妻一高）野球部を水戸中学・一高で一緒だった平野 正朝と共に指導し、1901（明治34）年には、当時無敵を誇っていた水戸中学を5対1で破りました。この試合を見ていたのが当時水戸中学1年だった飛田 穂洲（本名・忠順 1960年殿堂入り）です。「水戸中学において選手になろうとの決心を強くしたのは、水中最初の敗戦、対下妻中学戦に非常な衝動を受け」（『野球生活の思い出』より）穂洲は野球部の選手となります。穂洲は順次郎を「或意味に於ては私にとって野球の恩人であるともいえよう」（『野球人国記』より）と書いています。



前列右から二人目が長塚 順次郎氏 『野球年報 明治36年』より

順次郎は一高を卒業後、東京帝国大学工科大学で学びました。大学卒業後は実業の世界へ入り、会社経営に携わっていたようです。一高卒業後、野球とは距離をとっていたと思われる、プレーをした記録や順次郎の名前は雑誌などで見つかりません。順次郎の野球歴は水戸中学から一高までですが、当時としては珍しい変化球の専門書を訳したり、早大の名監督と言われた飛田氏に野球選手となる決意をさせたりと、当時の野球に深くかかわっていたといえます。

『魔球術』をはじめ明治・大正時代の資料は図書室でご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

司書 茅根 拓



コラム／博覧・博楽 (36)



馬立 勝（野球体育博物館維持会員）

白い帽子のツバだけが濃紺で、純白のユニホームの胸のチーム名も小さめの濃紺の文字。ストッキングは白地に濃紺の二本の横縞だ。この夏、オールド・ユニホーム・シリーズで巨人選手が着た1950年の復刻ユニホームは楽しかった。時間をどんどんさかのぼらせてくれた。

初めて後楽園で巨人の試合を観たのはこのユニホームから6年たった小学6年生の頃だから、ユニホームは変わっていた。けれども白が基調のユニホームは、メンコや少年雑誌の写真でおなじみで、よく覚えていた。

そしてこのユニホームがより強く印象付けられたのが大学時代だった。学生運動に揺れた1960年代、騒動をいいことに後楽園と映画館通いの名画座でぶつかったのが黒澤 明監督1949年作品の刑事映画『野良犬』だ。この中に満員の後楽園球場で、拳銃ブローカーを刑事たちが捕らえる10分ほどのシーンがあるのだが、このシーンの巨人・南海戦の実写で巨人選手が着ていたのが、復刻されたユニホームだった。以来、折に触れて、この野球シーンを味わい、調べ、楽しむことになった。

黒澤監督の脚本はこのシーンの試合を巨人・阪神戦に設定していた。川上 哲治、千葉 茂、青田 昇と並んで脚本には阪神の別当 薫の名が書かれている。実際、巨人・阪神戦は撮影されたようだ。ここからは映画関係者に聞いたのか、何かで読んだのか記憶があいまいなのだが、黒澤監督は撮ってきた画面が気に入らなかった。「プレーの爽快さが出ていない」ということだったらしい。そこで劇映画専門のカメラマンでなく、ニュース映画のカメラマンを集めて撮り直しをさせたそう。その試合がカードが変わった巨人・南海戦だった。ビデオのコマ送りで確かめると一瞬映るスコアボードは巨人・阪神戦だ。編集で前に撮った場面も混ぜて使ったのだろうが、手間のかかる撮り直し、いかにも完璧主義の黒澤監督だ。

あの野球シーンは、いろいろなことを思い出させてくれる。夏の後楽園のデーゲームのスタンドは白一色だった。応援団はいなかった。帽子をかぶっている観客が多かった。フェンスの上にネットはなく、大リーグの球場のように選手とファンが身近だった。実写シーンはまさしく我が少年時代の後楽園体験と重なるのだが、驚いたのは「さあ皆様、ラッキーセブンでございます」との場内アナウンスと共に7回裏の巨人の攻撃の前に観衆が立ち上がって背伸びするセブンス・イニング・ストレッチが記録されていたことだ。大リーグ中継でお馴染みになった「7回の背伸び」。日本でもやっていた貴重な記録だが、スタンドの小学生の私はやったのだろうか、どうしても思い出せない…。

選手のプレーが続いた後のシーンも格別だ。場内アナウンスで拳銃ブローカーを誘い出し逮捕するその場所がOB記者には懐かしい。らせん状に降っていく階段、丸い窓、試合終了後に記者席からロッカーに駆け降りた“取材通路”なのだから。

巨人の復刻ユニホームは入れ子細工のように次から次へと思い出シーンを引き出してくれた。「昔の空は青かった」みたいな気分になったのだが、高く広い青空はドームの天井に変わり、後楽園球場も消え、記者席に並んで話を聞いた千葉さんも青田さんももういない。往時茫々の思いで復刻ユニホームを見直した。野球だけが変わらない。



2010年 夏休み報告

当館では毎年夏休みに小・中学生を主な対象としたイベントを行っています。今年も「野球で自由研究!」「バット製作実演」「夏休み親子ボール製作教室」を行いました。

夏休み中の来館者は約32,500人で、WBC優勝効果で来館者が多かった2009年に比べ90%、2008年と比べ112%の来館者数となり、イベントを通じて多くのお客様に野球に興味を持っていただけたのではないかと思います。

今後も特に野球ファンになりたての子ども達や、これから野球を始めようとしている小学生にさらに興味を持っていただき、もっともっと野球を好きになってもらえるようなイベントを実施したいと考えています。

● 野球で自由研究! ● 7月17日(土)~8月31日(火)

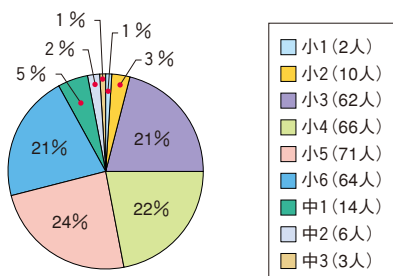
館内の図書室・イベントホールにおいて、野球をテーマに自由研究を行う小・中学生をサポートする「野球で自由研究!」を行いました。今年で9年目になりますが、多くの子どもたちが自由研究のために情報収集していました。

今回は「硬式野球用具に触ってみよう」をテーマに、硬式用のバット、グラブ、キャッチャーマスクやプロテクターの実物を展示しました。また、2009年WBCモデルのユニホームを実際に着てみるイベントを行い、約2,650人の子ども達がユニホームに袖を通し、記念撮影をしました。また、野球用具をより知ってもらうために「バットのできるまで」や「ボールのできるまで」等情報を提供しました。この他にも野球の歴史や野球場、野球用語についての資料を提供しました。

自由研究を行った小・中学生は298人(302人)で、特に小学校6年生が64人(49人)と昨年に比べ30%増加しました。小学校3年生から6年生がそれぞれ60人を超え、4学年の合計は263人となり、全体の88%を占めました。昨年は3年生・4年生の中学年に広がりを見せていましたが、今回は小学生全体に広がる傾向となりました。()は昨年



学年別利用者数



学年別主な自由研究のテーマ

(テーマが複数の場合あり)

	用具	歴史	野球場	記録	選手	用語	プロ野球	その他
小1	0	0	1	0	0	0	0	1
小2	8	2	0	0	0	0	0	3
小3	20	14	5	3	7	1	0	6
小4	17	21	5	7	1	3	3	11
小5	33	21	5	5	2	4	3	5
小6	27	22	4	4	2	2	0	4
中1	5	3	1	0	0	0	0	5
中2	1	2	0	0	0	0	0	1
中3	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	111	87	21	19	12	10	6	36

テーマで一番多かったのは、全体の36%にあたる111人が調べた野球の用具でした。次いで29%の87人が調べた野球の歴史となり、今年もこの2つが自由研究の大きなテーマとなりました。また、今年開幕した女子プロ野球や、ドラフト制度についてなど、これまで出たことがないテーマを選んだ子どもも多くいました。

● バット製作実演 ● 8月17日(火)、18日(水)

協力：ミズノ株式会社



今年も「バット製作実演」を開催(2004年以来7度目)。ミズノテクニクス渡邊孝博クラフトマンによる実演や説明を多くのお客様がご覧になりました。自由研究用に熱心にメモをとる小学生や、実演の様様を写真やビデオに収める家族も多く、今年も大好評のイベントとなりました。

● 親子ボール製作教室 ● 8月19日(木)

協力：ミズノ株式会社



昨年に続いて2度目の開催。当館ホームページなどで参加者を募集、133通の応募の中から抽選で選ばれた20組40名の親子が参加しました。

当日はミズノインダストリー阿山からご来館いただいた講師の指導のもと、各組とも1時間弱でボールを完成させ、「自分でつくったボール」をお持ち帰りいただきました。自由研究向けのメモや撮影をしている親子も多く見られました。



野球体育博物館 トピックス (2010年7~10月編)

【8月3日】金田氏が来館

金田 正一氏 (1988年野球殿堂入り) が来館されました。東京ドームでの巨人対阪神戦の試合前にお孫さんと来館、展示をご覧になりました。



【8月9日】松永氏が来館

松永 怜一氏 (2007年野球殿堂入り) が来館されました。企画展「世界の野球展~日本代表 激闘の歴史~」をご覧になりました。



【10月6日】文京ミュージズネット ミニコンサート 開催



文京シビックホール開館10周年を記念してのミニコンサートで、文京ミュージズネットの加盟施設で開催されており、この度、当博物館で開催されました。

東京フィルハーモニー交響楽団メンバーによる金管五重奏で、文京区

民の方々を中心にたくさんのお客様が来館されました。

出演者 古田 俊博、杉山 真彦 (トランペット)、五十畑 勉 (ホルン)、米倉 浩喜 (トロンボーン)、長谷川 正規 (チューバ)

【10月12日】「女子野球」展示スタート

2010年第4回 IBAF 女子野球ワールドカップでの日本代表連覇達成を記念して、常設展示日本代表コーナーの一角に、「女子野球」コーナーを設置しました。



女子日本代表や女子プロ野球の歴史を紹介しています。

博物館からのお知らせ

▶ 販売中!

▶ 東尾 修氏野球殿堂入り記念直筆サインボール



平成22年に野球殿堂入りされた東尾 修氏の直筆サインボールを販売します。ご購入ご希望の方は、当館ホームページをご覧ください。

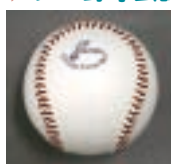
(<http://www.baseball-museum.or.jp>)

*数に限りがありますので、お求めはお早めに。

商品説明

[ボール] NPB公式ボール 直筆サイン入り
[素材] ケース: ガラス/台座: 木製 [色] ケース: 透明/台座: ブラウン
[サイズ] ボールケース: 縦14.5cm×横13cm×奥行(台座含)13cm
[付属品] 野球体育博物館証明書、野球殿堂2009(書籍)、野球体育博物館ご入館券(6枚)

▶ プロ野球公認球



1個 1,600円(税込)

コミッショナー事務局(NPB)では、日本野球独特の「反発テスト」をしています。超高速マシーンから打ち出したボールを鉄板にぶつけ、ぶつかる前の速度と跳ね返りの速度を計り、その比(反発係数)を出して、一定範囲に納まるものを「合格」としています。マシーンと連動のパソコンで計測されますが、専門的にいいますと「秒速75メートル(時速270キロ)のところまで反発係数0.41~0.44の範囲に入ると合格」となります。この基準を上回ると「飛ぶボール」で不合格、下回ると「飛ばないボール」でやはり不合格です。合格したボールに「試合に使うにふさわしい」との合格印「Official Game Ball」が押されます。このコミッショナー印の押された試合球は、一般には販売していません。それほど「貴重」なのです。

※郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金(公認球代+梱包送料)を現金書留で当博物館までご送付下さい。

梱包送料: 1個 250円 2~3個 400円 4~6個 600円

送付先: 〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

財団法人野球体育博物館 公認球係

※7個以上お求めの方は、当博物館(TEL:03-3811-3600)までお問合せ下さい

●編集後記 暑かった夏同様、順位が毎日入れ替わる混戦のペナントレースも、熱かったです。そしてこの号がでるころには、日本シリーズが始まります。熱い野球シーズンは、まだまだ続きます。

▶ グリーンリストバンド

500円(税込)



プロ野球選手が装着し、温暖化防止をアピールする「グリーンリストバンド」を当館でも販売いたします。売上金の一部はCO₂削減のための植樹活動に役立させていただきますので、温暖化防止活動にご賛同いただける皆様のご参加・ご協力をぜひお願いいたします。

▶ 役員・評議員の交代

10月2日の任期満了に伴い、理事11名・監事2名・評議員25名の方には再任を、また前評議員・瀬戸山 隆三氏の後任として、石川 晃氏(千葉ロッテマリーンズ 執行役員)にご就任いただきました。

今後とも、よろしくお願い致します。

▶ 2011年野球殿堂入り記者発表

2011年の野球殿堂入り記者発表を、2011年1月14日(金)に館内の殿堂ホールで午後3時から行う予定です。

ご入館の皆様も、記者発表のようすをご覧になれますので、ぜひご来館下さい。

● 博物館のご案内

場所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日~9月30日 AM10時~PM6時

10月1日~2月末日 AM10時~PM5時

(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大人 500円(300円) } () は
小・中学生 200円(150円) } 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末年始(12月29日~1月1日)

【11月・12月・1月の休館日】

11月 1日・8日・15日・22日・29日

12月 6日・13日・20日・27日・29日~31日

1月 1日・17日・24日・31日

Newsletter Vol.20 / No.3

2010年10月25日発行

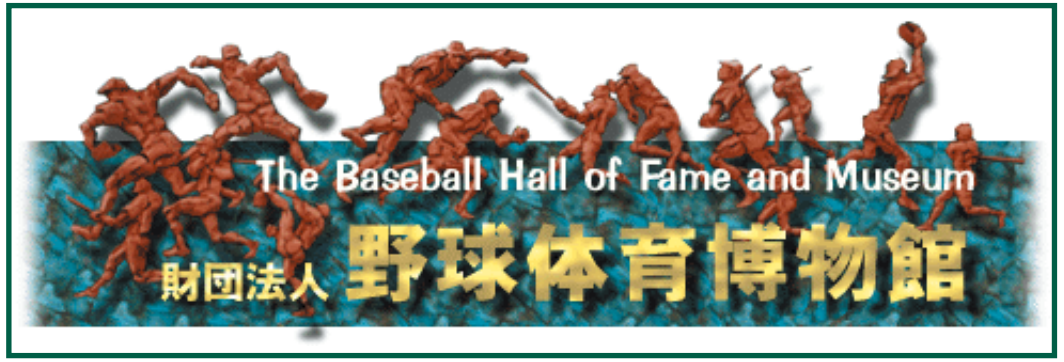
編集・発行 財団法人 野球体育博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>

定価 100円



リレー随筆(42)

競技者表彰委員会委員 駒澤 悟(報知新聞社広島支局)

セ・パ大混戦のうちに今年のペナントレースは幕を閉じた。5年前から始まった交流戦とクライマックスシリーズ(2007)は、両リーグとも大盛況だった。長い間、閑古鳥が鳴いたパ・リーグのスタンドは、いまや満員の観客に埋まる試合も増えた。華やかで整然とした応援合戦。きたないヤジが飛び交った一昔前と違って、見ていて楽しい。コミッショナー、各球団が一体となったの球界は、良い方向へ“変革”して来たように思う。

筆者は40数年に渡って、広島を主にプロ野球一筋に携わって来た。古き良き時代を懐かしみながらも、現実(プロ野球)の素晴らしさに感動しながら球場通いが続く。広島は昨年市民、県民の願いでもあった悲願、新球場の「マツダスタジアム」(市民球場)が完成。総工費が約90億円というから「安い予算でよく出来たものだ」と驚いたりもした。グラウンドは天然芝。場内は、グルリと一周できるコンコースに飲食店が色とりどりに並ぶ。メジャーの球場をモデルに調和の取れた「ボールパーク」だ。レフトスタンドは空間が有り、一瞬ではあるが新幹線、在来線(呉線)からそり上がった場内が見られる。センター後方右には寝ながら観戦できる「寝ソベリア」(二人掛)や、ライト側地下には一杯やりながらの見物(バー)、3階席には焼肉パーティーのテーブルなど、多様な楽しみ方が待っている。

この2年間の入場者は、初年度が球団創立以来空前の180万の動員数を記録した。(過去最高は昭和54(1979)年の145万人、最低は昭和27(1952)年の35万人)今シーズンは球団史上2位の150万人にとどまった。ご存知の通りカープの生い立ちは「市民球団」として昭和25(1950)年に産声を上げた。原爆投下によって廃墟の街と化した広島に、復興への灯と希望の光として誕生した。創立当初は選手の給料の遅配や東京、名古屋への遠征などは、当時国鉄の三等車や夜行列車でのザコ寝状態での移動が続いた。経営危機にも遭遇した。それを支え乗り切ったのは地元財界や「樽募金」で有名になった後援会組織による資金面のバックアップだった。

現在は「松田一族」(現オーナーの松田 元氏は3代目)で歴史を築き上げて来た。プロ野球では初めて「親会社」を持たない純然たる独立採算制を採って来た。12球団最も低い選手の年俸など、独自の経営方針で毎年黒字を計上している。例えば選手の給料を算出する査定項目は100以上の詳細なデータを並べ、契約更改をスムーズに運んでいる。営業面では、オーナー自らのアイデアによるグッズ売り上げは、数々のヒット商品をとばしている。旧市民球場時代とは比較にならない収益に一部の球団も参考している。球団全体では職員に無駄をいかに省いて明日に備えるか、チームにあっては出来る限り「自前で選手を作り出す」(故・松田 耕平前オーナー)育成方針を貫いて来た。2軍からはい上がってレギュラーポジションをつかんだのは衣笠 祥雄。高橋 慶彦(現・ロッテ2軍監督)、江藤 智(現・巨人育成コーチ)、現役の前田 智徳や金本 知憲(阪神)、新井 貴浩(阪神)、大野 豊(現・ヘッド兼投手コーチ)、200勝投手の北別府 学氏(解説者)ら名前を挙げればきりが無い。かつて巨人軍オーナー、渡邊 恒雄氏(現・会長)は「広島を見習え」と2軍の練習ヘスカウトやコーチに足を運ばせた。

地域密着の球界有きは、広島を含めたフランチャイズを置く北から札幌(日ハム)、仙台(楽天)、所沢(西武)、福岡(ソフトバンク)とフロント陣、営業職員らの努力によって、チームを盛り立て、さらなるファンを開拓して来た。賑わう球界にあって、一方では苦しい経営が表ざたになるなど暗い影も。勿論、危機を乗り越えてきた球団もある。今後、プロ野球発展のために、コミッショナーを中心に各球団のオーナーにさらなる“英知”を結集してもらいたい。